

# 『伝記』の扱い方を求めて

——野村実著「アルベルト・シユバイツェル」の扱いについて——

杉原康子

国語教育が、さまざまなかたちで、人間を育成していくことを目指している中で、伝記教材は、直接的に、人間性の養成、人間形成に、参加していける分野である。そりそりしい道徳教育などにゆられることなく、ほんとうに育てるべき人間性を、じっと見つめて、人間の真実根ざす国語教育の果敢を、求めつつけていきたいと思ふ。

たまたま、伝記教材の学海のてびきを調べる機会を与えられ、その資料を整えているうちに、「シユバイツェル伝」が、あちこちの教科書にとられており、しかも、そのとりあげ方にかなり相違のあることに気がついた。それからヒントを得て、この機会に、「伝記教材の扱い方」について、少しでも考えておきたいと思い、このテーマにとりかかった。

研究対象は、現行の中学校国語教科書の中で、野村実氏の筆になる「シユバイツェル伝」をとりあげている二種類の教科書、(今かりに、A社、B社とする。)である。

まず、両者の取材状況を一覧してみる。

	A 社	B 社
学年・单元名 (学期)	二年 三 勇気ある人 (三学期三月ごろ)	三年 五 伝記 (三学期二月ごろ)
量	6枚(400字づめ)	26枚
教材名	少年アルベルト	アルベルト・シユバイツェル
内 容	主題—シユバイツェル博士の少年時代— 内容—要約— ①博士の家庭環境 ②少年シユバイツェルの傾向 ③少年シユバイツェルの性格 ④少年シユバイツェルの思想 ⑤少年シユバイツェルの信条(自己を敬うない勇氣)	主題—シユバイツェル博士の生涯— 内容—要約— ①いつまでも少年の心を養 ②三十歳までは学問と芸術 ③ハッセルは今もシユバイツェルの中に生きてい ④黒人のための人間的奉仕の半生 ⑤偉大な夢の実現へ ⑥人間的奉仕としてのランパレネ病院 ⑦らい村 ⑧建設の労役にも手を貸す ⑨黒人への投薬 ⑩夕食後のピアノと執筆 ⑪老衰の葬式へ

# 1 取材上の問題点

## (1) 単元構成の態度について

両者の著しい相違は単元構成上の態度である。A社が、各学年を通して、テーマによって構成された単元の中に、テーマをもりたててのひとつの資料として、伝記教材を位置づけているのに対して、B社は、はっきりと、「伝記」というジャンルを認め、独立した単元として構成している。両者のこの相違は、当然のこととして、その扱い方（直接にはてびき）の相違となって表われている。ひとこと言えば、A社は、「伝記から」学ぶのであり、B社は、「伝記を」学ぶと言えるのではなからうか。つまり、前者は、「少年アルベルト」を通して、真の勇氣とはどんなものかを知り、それをもって生きていくことを考えさせる。後者は、「アルベルト」シュバイツェル」というひとりの人間の、戦いの生涯に感動し、それを根拠に、「いかに生きるか」への情熱と意欲とを喚起する。ここには微妙な（出発はそうであつても、後に大きなへだてとなる）相違があるように思う。A社の場合には、「真の勇氣」を学びとるということに、感動が方向づけられ、抽象化され、画一化されているために、感動そのものが、生の形でくみとられるよりは、ひとつの徳目として受けとられる可能性を強くもっている。徳目としての「ほんとうの勇氣」は、観念である。それを基とするくいかに生きるか。は、思考ではあつても、実践のエネルギーにはならない。さらに、A社について言えば、「勇氣ある人」の単元前書きの中で、「真の勇氣は、みにくい自己の心に打ち勝つた人のこと」と説いているが、「少年アルベルト」を通して考えられている真の勇氣は、「他人のおもわくにとらわれずに、自分の信ずる立場をはっきりさせ

る。」ということの中に見いだされている。この場合、自分の中にあるみにくいものに打ち勝つのではない、自分の中にある美しいものを守りぬくこととして、考えられはしまいか。もちろん、どちらも真の勇氣には違いないが、単元前書きで、片方に規定されてしまふのはおかしい。真の勇氣は、まだほかの場合にも考えられるはずである。この場合、単元を、ひとつのテーマ（主題）でくるといふことに問題があり、さらに、テーマの方向づけまでがなされていることに、無理があるのではなからうか。それは、教材の教育性を狭くしてしまふことになりはしまいか、ということを恐れる。ひとりの人の「伝記」から啓発されるものは、ひとりひとりの学習者に、もつと個別的にくみとられていくように思う。

こう考えてくると、B社が、「伝記」をジャンルとして独立させ、かなり長い、堂々としたのを並べて扱おうとしている方が、いいのではないかと思える。伝記における人間像が、空想力によって自由に創造された文学における人間像とは異なり、そこに書かれてある人間が、現実と戦うことによって造形された人間像であることを述べて、伝記の独自性を主張している。その人間の实在性が、強く読者の胸をうち、その共感なり、感動なりが、直接くいかに生きるか。ということに対するエネルギーとなるように思う。文学の教育性が、問題意識を喚起する力であり、感応作用を起す力である、と考えられると同じように、伝記の教育性は、ヒューマニステックな戦いの生涯に対する感動をおこさせ、明日を生きる情熱と意欲を喚起することにあると思う。その意味で、伝記はやはり、独立単元として構成されており、その人物の、長い生涯の記録が取材された方が、強い教育性を発揮できるのではないかと思う。

(2) 単元の扱ひ方について

特筆したいことは、導入と発展における両者の相違である。A社の場合、例へば、

① 単元名の「勇氣ある人」について、原の文を読んで考えさせ、

真の勇氣とは己に克つこと、精神的なものであることを悟らせる。

④ この単元は非常に価値の高い説物によって構成されていることを話し、それぞれの資料のどういふ点がすぐれているか読み味わうよう示唆する。(指導書四二六ページ)

のような、導入に見られるように、「真の勇氣」の内容を教えておき、価値の高い説物であることを知らせておいてから、真の勇氣なり、価値の高さを読みとらせようとしている。「少年アルベルト」に限って見ても、

① アルベルトとはどんな人か。注を読ませ、さらにこの資料の出典である「人間シユバイツェル」などにより、現代の精神的英雄である彼のアフリカ黒人に対する奉仕の生活の一端を語っておく。

(指導書四二六ページ)

となっている。これは、上からの指導であつて、学習者自身の興味をともなつた、下からもりあがる学習ではない。こういう形での先入観は与えないで、学習者自身が読みとつたものを帰納していく方がいいのではなからうか。この点、B社では、

「まず、学習者の身辺から、なんらかの点でその時代に、または後代に影響を与えている一人物をとりあげ、その人物のおい立ちや、生活・事業の一端などを話しあつて、伝記といふものの意義をわからせたりで、この単元の学習に進ませるといふ方法をとりた

(指導書一〇一ページ)

としている。学習者の身辺から出発し、その時代への影響という点からくみあげて、伝記の意義を納得させるといふ導入は、スムーズな学習を結果すると思ふ。導入はなるべくスッキリさせ、じかに教材に触れていく方が望ましいと思ふ。先に与えておくとするれば、たとえばB社のように、教材の性格についての大まかな理解にとどめ、学習の姿勢をととのえることに、とどめておく方がよいと思ふ。

発展としては、A社の場合、

① 真の勇氣はどんなことだったか。

② 真に「勇氣ある人」と思った人について、現在の人でも、小説中の人物でも思い出して話し合ふ。

③ 自分の尊敬する人について話し合ふ。(指導書四二九ページ)のようなことが考えられている。「少年アルベルト」だけについて見ると、

① シユバイツェルについてもつと読べる。

② シユバイツェルやその他の偉人の伝記を読んでみる。

(指導書四二七ページ)

のような項目があげられている。B社では、「かれらの身辺の人物を、めいめいが自由に選んで、その伝記を書かせ、それをグループ別に選んだりして、代表作を学級全体に発表し、話しあいをする」とが適当と思われる。」(指導書一〇一ページ)

前者の場合には、その単元の性格上、やはり、「真の勇氣」を読みとることに重点がおかれているように思ふ。「伝記教材」という点から考えてみると、A社の「少年シユバイツェル」は、「アルベル

トシユバイツエル」への導入であり、B社の「アルベルトトシユバイツエル」は、「伝言」への導入である。

学習活動では、A社が、話し合う、読む、という指示をだしているのに対し、B社の「書く、書く、発表する、書く、話しあう」には、くふうがあると思う。特に、書く、書く、こととの関連は、いい着想であると思う。この場合、「学習者の周辺の人物の伝記」を書かせようとしているが、このほかに、学習者自身の成長史を、例えば、「生い立ちの記」のようなかたちで、書かせてみるのもおもしろいではなからうか。

### (3) 量と対象学年について

当然(1)と関連して、A社は短く、B社は長い。しかも、A社は四倍強という量である。これは、対象学年が、二年と三年であることによってもかなり影響されると思うが、やはり、伝記教材に対する編者の見識の相違によるものであろう。エピソードを通しての暗示よりは、彼の性格・思想・信仰・理想(夢)の実現された姿のものに、直接触れたいものだと思う。したがって、例えば、この教材のような伝記は、かなり長いものを、三年で、しかも三学期ごろに、扱った方がいいのではないかと思われる。

### 2 てびきについての考察

#### (1) A社の場合

A社では「少年アルベルト」について、次のようなたびきをつけている。

「この文章を読んで、次のことがらについて話し合ってみよう。

1 シュバイツエルが、母と、「お互、目をもってよく語る」とができた。」とは、どういうことか。

2 「その日から、少年は、センチメンタルであることを隠さないことにした。」というのは、どういうことか。

3 「わたくしたちが、十四歳の少年の心になることができたならば、世の中はどんなに変わるであろう。」とシュバイツエルは述べているが、どういう意味だろうか。

4 少年アルベルトが夢みていたのは、どのようなことだろうか。

二 少年時代のツユバインセルは、どんなことでもであったか、それが最もよく現われているところをあげて、説明してみよう。

三 この文章には、シュバイツエルの少年時代のほんの一部分の事が述べられている。かれについて、もっといろいろ調べてみよう。

(以上「学習のために」)

これらの発問の特色をひとこと言ってみると、教材とせながらあわせの発問といえるようである。

一の1は、シュバイツエルと母との、深い愛によって結ばれた姿を理解させようとしていて、そのこと自体は、かれの家庭環境を語るものとして、意味をもっていると思うのだが、もう一歩、それが、彼の性格なり、思想なりに、どう影響したかを、読み取らせる必要はないだろうか。2は、日曜日の朝のエピソードを通して、センチメンタルであることを隠さないことにした。そのことは、真の勇気があることを考えさせている。これも、真の勇気を学ぶことはいと思うのだが、それがかれの生き方の中に、どう貫かれたかを問わなくてもいいであろうか。(これを問うとすれば取材

範圍も変わってくるが。) 眞の勇氣というテーマを学ぶことに急で、シユバイツェルその人の人間を読み取るような方向で、発問がなされてない。このことは3でも同じで、シユバイツェルのことばを通して、「おとなの世界の複雑さや、謙遜と眞の勇氣とが同じものの二面であること」などを、考えさせようとしている。このことばを言ったシユバイツェルその人についての考察が弱くはないだろうか。ここはむしろ、若き日の理想をたたえ、その理想を見失わないことのすばらしさ(偉大さ)を、読みとるべきではなからうか。4は、比較的少年アルベルトに即した発問でいいと思うが、実現された理想(夢)の、高い価値を深く学びとるためには、「アフリカの聖者」というような形での話しあいではなくて、黒人とともに働く博士の姿を、じかに読み取らせる方がよいように思う。(これもまた取材上の問題と関連する。)

二では、少年時代のシユバイツェルは、どんなことでもあつたかを読み取らせようとしている。表現がおさえられている点はよいと思うが、それがそれだけのものとして、ポツンポツンとつかまれて答になるのでは、やはり不満である。

三、一や二での不満が、ここで発展として満たされようとしている。このように、切り離された形で発展に期待するよりは、各問の自然な発展として、考えられた方がよいと思う。そのためには、やはり取材上に根本的な問題があり、教材選定の基準に考察の余地があるのではなからうか。総じて、もっと「考えさせる」発問であってほしいと思う。

## (2) B社の場合

B社の「アルベルト・シユバイツェル」についての設問は、次のようである。

一 シユバイツェルはどんな家庭に育ったか。また、それはかれにどういふ影響を与えたか。

二 「わたしはものごころついてから、こともらしい生活の喜びを味わったことがなかった。」ということは、どんな意味か。

三 少年時代に芽ばえ、かれの一生を支配した思想とは、どんな思想であつたか。

四 大学にはいつてから、かれはどのように変わったか。また、どんな生活をしたか。

五 かれの一大転換とはどんなことか。また、なぜかれは転換しなくてはならなかつたか。

六 人々はかれのアフリカ行きをなぜ理解しなかつただろうか。

七 かれが決心したことを実行するまでに、どんな準備をしたか。

八 アフリカでかれは、どんな苦難とたゝかわなくてはならなかつたか。

九 ランバレネ病院の章を読んでシユバイツェルの人がらについて考えよう。

十 かれの偉大さはどこにあると思うか。

十一 かれは、どのようにして自己を高めていったか。

(以上「学習の手引」)

以上、十一の設問が、読解の筋道にしたがってなされていることは、よいことだと思ふ。

一でまず、シユバイツェルの家庭環境を学び、それが彼にどうい

う影響を与えたかを知る。

二では、少年時代からあつた、鋭い罪悪感や倫理感を学びとり、

三で、こうしたかれに芽ばえていた思想、——一生を支配した思想を考えさせている。

四、少年時代を過ぎて、大学時代、そこでの変化を問うて、それまでの高校時代を理解し、さらに、彼の思想が、すでに実践にうつされていることを知る。

五、こうしたかれの上にどんな一代転換が起つたのか、またそれは、どんな必然性をもつていたのか、を讀みとらせようとしていゝる。「なぜかれの転換がなされなければならなかつたのか。」は、かなりむずかしい問であるが、こういう問こそなされなければならぬと思ふ。この間に答えることは、シュバイツェルの本質をつかみうることであり、ことばを追う讀みではなく、考へる讀みを指向するからである。

六、この転換の決意を断行するかれを、人々はなぜ理解しなかつたのであろうか。そのなぜを考へることは、かれの偉大な理想と使命觀を学ぶことになる。

七、次に決心の実行のために、どんなことをしたかを考へることによって、彼の超人的な努力の日々を思ふ。

八では、アフリカで、なみ／＼ならぬ苦難と戦いつづけたかれの姿に、思ひをひそめる。

九、ここからは、ランバレネ病院での博士の姿を書いた部分であるが、まず、らい村での黒人たちとの關係を通して、シュバイツェルの、人間性をくみとる。

こうしてひととおりの、少年時代から現在までの、足どりをたどつ

たあと、まとめとしての発問が、十、十一とつづいてなされている。

十、かれの偉大さを、ひとりひとりだが、それぞれの深い共感の中でうけとめていく。指導書を見ると、「『よいものを受けている者は、それだけ多く他人に与えなければならぬ。』」とある。悩みから解放された者は、他人の悩みを軽くしてやらなければならぬ。われわれは互に、不幸の重荷を分けあわなければならぬ。』という若い日の理想をどこまでも追求して、学問と芸術ですばらしい天分を發揮し、社会的地位と名譽を与えられたにもかかわらず、それをなげうつて、アフリカの黒人救済に全力を尽したところに、その偉大さがある。」(一一一ページ)と答へられている。共感されるところは、ほぼこの線につながるであろう。

十一、最後に、かれの自己形成の過程を、通して読解させ、その高めゆく道筋から、学習者自らに、自己形成へのエネルギーをくみとらせようとしている。

これらの発問をひとことでは、**「教材によりそつた発問」**であろう。つまり、あくまでも、シュバイツェルその人を讀みとり、讀み深めるための発問である。その深い讀み取りの中での共感、感動こそが、明日を生きる原動力となるであろう。こうしたてびきによる学習を通して、「すぐれた人の一生から、人間の生き方についていろいろなことを讀みとらせる。」という指導目標も、達成されていくと思ふ。ただひとつ、その発問の中に、現代社会に対するシュバイツェルの存在価値、影響力といったよりなものを、考へさせる間がないのは、惜しいことと思ふ。

公平な考案を加えたいと努力したのであるが、反省としては、B

社に、好意的な考察が傾いているということを思う。このことは、感情の介入がないものとすれば、(介入しないように努めたが、ぜんぜん)ないとは言いきれないかもしれないので)「伝記教材の扱い方」に対する、私なりの考えが表われているのだと思う。この考え方の底には、倉沢栄吉氏の「読解指導」における「伝記文の扱い方」がひそんでいる。「伝記文の読みの中心になるのは、調べ、読みではなくて共鳴する読みである。」「『すなおに全体を読みとって、その苦心や成功に同情し、おどろくこと』である。」「伝記文は記録文でなくて文学であるという見方は正しい。教材としての伝記文はまさにそうである。すなわち、作品全体としてのよりあがりや起伏に目を向け、それを現代や自己との対比において感得していく。だから、歴史的意義、現代的意義をもっている。感動から自奮への情動的な探索である。」「伝記文で『この文にはなにが書いてありますか』などと問うのは、指導の手順としては許されるが、本質ではない。「心をうつ人々」という題材では、「心をうつこと自体」を読みみとっていかなければならぬ。」(「読解指導」第三章、物語文指導の具体案、第三節 伝記文二九ページ―三〇〇ページ)のよゆうなことに教えられ、自分のものさしにとり入れているために、やはり、そうした観点からの考え方が、強くできてきているのではないかと思う。これからの実践を通して、考察したことを確かめていきたいと思う。

(昭和三四・十・三)